

# 日本語記述文法の研究対象としての 自立化への歩み

—時代背景の中で

仁田義雄

## ◆要旨

この覚え書きは、1970年頃以後、現代日本語文法の記述的な研究が研究対象としての承認を得ていく歩みを、日本語研究の流れ、学問を取り巻く社会的な状況などの中に置いてみて、粗々と描いていくことを目的としている。当時は、現代日本語の文法を分析・記述することが、学的営みになるのか、という疑念がまだあった時代である。

## ◆キーワード

現代日本語記述文法、日本語文法研究史、日本語教育、研究環境、社会情勢

## ◆ABSTRACT

This paper aims to outline the course which the field of modern Japanese descriptive grammar strode since the 1970's in order to gain recognition as an independent field of research study. I will discuss the development of Japanese studies from a historical perspective, taking into consideration the path it strode and the surrounding social context. It was a time where analysis and description of modern Japanese was treated quite skeptically with regard to its potential of becoming an academic discipline of its own right.

## ◆KEY WORDS

descriptive grammar of modern Japanese, history of the study of Japanese grammar, Japanese language education, research environment, social context

Japanese Descriptive Grammar:  
its path towards recognition  
as an independent field of study  
The historical context

YOSHIO NITTA

## 1 はじめに

この覚え書きは、1970年頃以後、現代日本語文法の記述的な研究が研究対象としての承認・市民権を得ていく歩みを、日本語研究の流れ、学問を取り巻く社会的な状況などの中に置いてみて、粗々と描いていくことを目的としている。1970年を一応の基準点として、それ以前の時期をも含めそれ以後の現代日本語文法の記述的な研究の歩みを追っていくのは、1970年が、仁田がほぼ研究を始めた時期だからである。この覚え書きは、広い意味で研究史の領域に属するものである。仁田の研究生活の時期とほぼ重なり、述べていき方をも含め、その意味でも、極めて私的な研究史ということになる。

ちなみに、1970年は、第二次大戦終了後既に25年経った年であり、『国語学辞典』が国語学会の編纂物として刊行されてから15年経った時期でもある。

## 2 仁田の目に映った戦後の日本語文法研究

まず初めに、戦前の研究にも目配りしながら、仁田の目に興味深いものとして映った戦後の日本語文法研究の状況・歩みを、いくつかのグループに分けながら粗々と記しておく——仁田の目に映ったということは、仁田の見方で記しておくべきものとして捉えられたというに過ぎず、他の人間が描けば違ったものが選り取られる可能性がある、ということであり、その意味でも私的な史的展望である——。現代日本語文法に対する記述的研究は、これら先行研究での成果を基本的な栄養源としながら、このような研究状況の中で自覚化され遂行され、研究対象としての承認へと歩みを進めていった。

当時の国語（日本語）研究は、文献学的な史的研究や方言研究が中心であったと感じられた。文法研究においても、歴史的な文献がその対象に据えられることが多く、現代日本語の文法研究、ましてや文法現象への単なる分析・記述などは、研究以前の作業として位置づけられているような、漠然とした空気を、仁田などは感じさせられることがあった。

### 2.1 陳述論争

明治期以降の文法研究に対して、仁田は個人的には、『改選標準日本文法』（1928）に結実する松下大三郎の研究を最も先駆的で優れたものと見なしているが、伝統的な主流の文法研究は、助詞や副詞などの分類を含め、山田孝雄の文法研究に大きな影響を受けながら展開してきたと思われる。

[1] 山田孝雄の多方面な成果からの影響（森重敏や川端善明の研究もこの流れにあるが触れない）の中で、ここでは後にいわゆる陳述論争と呼ばれることもある研究の流れについて瞥見しておく。陳述論争とは、概略、山田の「統覚」「陳述」という概念から発し、文とは何か、文の成立をどのように捉え位置づけるのか、という問いかけの歴史である。まず、山田の「陳述」という概念への疑問や不備を指摘する論が現れる。三宅武郎『音声口語法』（1934）での指摘や三尾砂「文における陳述作用とは何ぞや」（1939）がそれである。

時枝誠記の論も、文とは何か・文の成立とは、という問いの歴史の中で一つの位置を占める。ただ、時枝の「陳述」は、山田と同じ「陳述」という用語を使いながら、基本的に山田とは関係なく、自らの言語過程説・詞辞の論の中で、表現論（言語主体論）的な文成立論を展開していくためのものである。時枝の論は、大きな影響を与えながらも、重大な批判を受けることになる。時枝への批判的な展開の論としては、大野晋「言語過程説に於ける詞・辞の分類」（1950）、阪倉篤義『日本文法の話』（1952）での論、金田一春彦「不変化助動詞の本質」（1953）などがある。

[2] 山田の「陳述」が文の成立に対して有していた不十分・不正確さに対する一つの解答を与えた論に、渡辺実「叙述と陳述—述語文節の構造—」（1953）がある。渡辺の研究は、山田を受け継ぎながらも時枝の洗礼を受けた研究である。渡辺実の研究は、時枝文法への大いなる共感と疑問から出発する。渡辺は、かつて「……私はやはり、時枝さんというのはいろんなことをいわれるけれども、「話し手」という言語主体を表面に引っ張り出してきた功績は非常に大きいと思うのです」（『シンポジウム日本語2・日本語の文法』:31）と、語っている。

渡辺は、その後、芳賀綏「“陳述”とは何もの？」（1954）での自らへの問題提起を受け、それを取り込んだらうで、文の成分の構文的職能への考察や「叙

述」と「陳述」の別の設定などを行い、『国語構文論』（1971）を完成させる。仁田は、渡辺の研究を、陳述論争のある種の成就と終焉であると見なしていた。文や文の成立論に興味のあった仁田は、かつてこの流れを《日本文法学派》と呼び、日本語文法研究のメイン・ストリームと見なしたことがある（仁田「文法論争」1988での言及）。

## 2.2 現象重視・現象記述派

[1] ここでは、現象重視・現象記述派と仮称し、まず佐久間鼎の研究に触れておく。佐久間は、自らの研究姿勢を「事理相即」と称し、「……空中から大観して外側から鳥瞰図をとるといふ風な考へ方ではなくて、事実を掘下げていつていはば地層として連なる一貫した脈絡を捉へるといふ方へ心が向いていく……」（『現代日本語法の研究』序2）と述べている。ただ、佐久間の活躍の中心は戦前にある。

文法現象を注意深く観察し、なるたけ先入観を廃し、実用にも耐える記述・説明の実現を目指した研究者に三上章がいる。佐久間は、三上が日本語文法研究を自らの課題にする契機を与えた存在でもある。三上は、「私の文法研究は佐久間先生の「日本語の特質」四十一年を偶然一読したことから始まった。全くの偶然で、もしこの偶然がなかったら、私の後半生が日本語文法専攻というコースを取るようなことはなかったかも知れない」「私の願いは現代語の実用的なシンタクス一冊を書くことである」（共に『現代語法序説』1953、「後記」:366）と述べている。三上章は、普遍性を持った土着主義者、アカデミズム（研究・教育をすることで食を得ている）の外にいた研究者である。主題重視（主語という用語の廃止）、単式（中止法）・複式〔軟式（条件法）・硬式（終止法（+接続助詞））〕の提唱なども行っている。『象は鼻が長い—日本文法入門—』（1960）などは言語研究者以外にもよく読まれた書物。さらに、三上は寺村秀夫にも大きな影響を残している。また、三上の上記の本は仁田が日本語文法研究に向かう一つの契機でもあった。

さらに、この系列に三尾砂を入れてもよいだろう。三尾には、『話言葉の文法 言葉遺篇』（1942）——改訂版『話しことばの文法』（1958）——、『国語法文章論』（1948）などがある。判断文・現象文といった文の類別を提唱している。

[2] このグループの特徴は、国語（日本語）学を専門・専攻する人達ではなく、外部派とも言える存在である。佐久間は心理学者、三尾は早稲田大学の哲学科出身で児童言語発達や心理学を学び、戦災孤児養育のための青葉学園の園長を務めた人間、三上は東京帝大工学部建築学科出身で、長年、高等学校の数学教諭であった。

## 2.3 国語研究所グループ

戦後の現代日本語文法の研究において、国立国語研究所に集った研究者達の研究は言及に値するものである。国語研究所ということもあって、彼らの研究には、実際の資料・データに裏打ちされたしかも共同討議の結果によるものである、という特徴・強みが観察される。このグループには、林四郎や『話しことばの文型（1）・（2）』（1960・1963）の作成・執筆に関わった者として宮地裕・南不二夫・鈴木重幸などがある（彼らはそれぞれ後に研究所から大学などに移って活躍）。

南不二男は、[A類（描叙段階）<B類（判断段階）<C類（提出段階）<D類（表出段階）]という節の階層理論を提唱する。南には、「複文」（1964）、「述語文の構造」（1964）、『現代日本語の構造』（1974）、『現代日本語文法の輪郭』（1993）などの業績がある。南は、三上章や林四郎などからの影響を受けている。林四郎には、『基本文型の研究』（1960）、『文の姿勢の研究』（1973）などがあり、文の生成過程、結果として文の層的構造について、[描叙段階→判断段階→表出段階→伝達段階]という階層的段階を提案している。

## 2.4 言語学研究会の学派的集団研究

日本には学派的な結びつき・研究は珍しい。その例外として、奥田靖雄をリーダーとするグループが挙げられる。この学派の特徴は、豊富な事例に基づく分析・記述であり、重要な主張の一つに、助詞や助動詞は単語以下の存在、という単語の捉え方がある。奥田は、「単語は語彙的なものと文法的なものとの有機的な統一物である」（『ことばの研究・序説』:27）と述べている。このグループの業績として、文法カテゴリ・文法的意味の取り出し・重視、アスペクト、連語論、文論での研究成果が挙げられよう。鈴木重幸『日本語文法・形態論』

(1972) や言語学研究会編『日本語文法・連語論』(1983) は、この学派の重要な業績である。仁田は、大学教員になってこの学派の存在を本格的に認識、この学派への仁田の注目はその研究の歩みと同時期的、したがって仁田への影響にも大きいものがあった。

### 3 仁田が研究を始めた頃の学界の趨勢

ここでは、日本語の研究特に現代日本語文法の記述的研究を取り巻く当時の社会や学界の状況を粗々と見ておく。

#### 3.1 当時の研究・教育機関の現状

ある領域の学問の発展・継承さらに言えば学としての自立には、大学や研究機関の存在が前提になり、重要な役割を果たす。

[1] 主要大学：大学は、当該領域の研究者が教員として在職しており、自ら研究成果を発表していくとともに、学生を指導し後継者を養成する。研究領域の発展・展開には、大学が重要な役割を果たす。まずここでは、大学を取り上げ、1970年前後の教員状況のありようを概観する（ここでは、大学院を有し、研究者を養成することを一つの目的とする大学をいくつか取り上げた。選択は仁田の恣意的な判断）。それぞれ文学部・文学研究科の教員を中心に挙げておく。氏名の後の（）はそれぞれの中心的研究領域。

北海道大学には、五十嵐三郎（方言・古典）・西田直敏（敬語史）がいた。その後石塚晴通（訓点語）が着任。東北大学には、佐藤喜代治（語彙史・文章史）・加藤正信（方言）が在職。東京大学では、時枝誠記の後を受けて、松村明（江戸語・東京語、洋学資料）・築島裕（訓点語）がいた。東京教育大学（筑波大学）では、佐伯梅友（文法史）の定年後、中田祝夫（訓点語）・馬淵和夫（韻学史）・小松英雄（声調史・国語史）が在職。東京都立大学では、大久保忠利（国語教育・現代語文法）が定年まぢかで、平山輝男（方言）・中本正智（方言）が在職、その後奥津敬一郎（現代語文法）が一時期在職。名古屋大学には、文学部には国語学の教員がいない、教養部に金岡孝（文章論）がいた。京都大学には、文学部に遠藤嘉基の後を受け、浜田敦（朝鮮資料）・安田章（中世語）が在職、教養部に阪倉篤義（語構成）・

渡辺実（文法論）・川端善明（文法論）がいた。ちなみに、文法研究における京都派といった存在を指摘できよう。阪倉篤義・森重敏・渡辺実・川端善明らがそれで、彼らの研究は、文学研究の深い造詣を併せ持ちながらの文法研究という特徴がある。大阪大学には、池上禎造（文字・表記史、漢語）・宮地裕（現代語文法）がいた。広島大学では、土井忠生（キリシタン資料）の後、藤原与一（方言）・小林芳規（訓点語）が在職。九州大学には、春日和男（文法史）・奥村三雄（アクセント史）がいた。

主だったいくつかの大学の在職教員状況からは、やはり国語（日本語）研究は史的研究や方言研究が中心であったことが分かる。

[2] 国立国語研究所：研究所であることから来る、研究者の多さということもあり、現代語の文法研究においては、国語研究所は特別な位置を占めている。永野賢『現代語の助詞・助動詞』（1951）は、機能語の意味・用法という伝統的な問題を扱ったものであるが、用例を踏まえた分析・記述ということで貴重である。既に触れたが、大石初太郎・宮地裕・飯豊毅一・吉沢典男『話しことばの文型（1）』（1960）、大石初太郎・宮地裕・南不二男・鈴木重幸『話しことばの文型（2）』（1963）も、実際のデータに基づく貴重なもの。少し時代は下るが、宮島達夫『動詞の意味・用法の記述的研究』（1972）、西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』（1972）、高橋太郎『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』（1985）なども、大量の実例に基づく分析・記述である。大量の実例に基づいた研究であるということが、研究所という研究機関であるということから来る強みである。

#### 3.2 出版状況

研究者は、研究成果を上げるとともに、それを公刊し、研究の交流・進展を目指す。後からその領域を志す研究者の卵にとっては、刊行された書物は栄養源である。その意味で出版状況は、研究者にとって自らの研究の環境である。

研究書については次に触れることにして、ここではいくぶん啓蒙的な講座物や雑誌について少し見ておく。講座物としては、[1]『日本文法講座』正編6巻+続編4巻（1957～1958）が挙げられる。これは講座物ではあるが、質の高いものという印象を持った。これには、「総論」「文法論と文法教育」「文法史」「解

積文法」「表現文法」「日本文法辞典」(以上正編)、「文法各論」「表記編」「文章編」「指導編」がある。[2] 次に、『口語文法講座』6巻(1964～1965)を挙げておく。これは、「口語文法の展望」「各論研究編」「ゆれている文法」「読解と文法」「表現と文法」「用語解説編」という各巻構成になっている。引き続き雑誌を見ておく。『月刊文法』(1968年創刊～1971年休刊)が短期間ながら編集・出版された。この雑誌のサブタイトルは、「指導と研究のための国語セミナー」である。いずれも高等学校を中心とした国語教育の現場にかなりの軸足を置いたもの(雑誌および講座物[2]はその感が強い)である。

## 4 1970年代前後の研究環境

以下、現代日本語文法を記述的な姿勢で研究してきた一人である仁田の歩み・研究時期と重ね合わせながら、当時の研究環境・研究状況を瞥見しておく。

### 4.1 当時の研究状況

[1] 日本における研究書：研究者の卵・駆け出しの研究者にとって、先行の研究書は、自らの学識を深める源でもあり、克服すべき存在でもある。その意味で、1970年前後どのような研究書が刊行されていたのかを見ておく(やはり選択は仁田の恣意的なもの)。仁田には、森重敏『日本文法通論』(1964)、大久保忠利『日本文法陳述論』(1968)、永野賢『伝達論にもとづく日本語文法の研究』(1970)、渡辺実『国語構文論』(1971)、宮地裕『文論』(1971)、鈴木重幸『日本語文法・形態論』(1972)などが印象に残っている。『日本文法通論』は、当時の仁田には通読できなかつた(今でも理解度に不安が残る)。ただ、『日本文法—主語と述語—』とともに、自分の立場とは極めて異なるが、仁田には興味深かつた。『日本文法陳述論』は、総主論争・陳述論争を跡づけた書で、「文の成立」という卒業論文を書いた仁田には参考になった。『国語構文論』には、研究開始の極初期最も影響を受けた。『日本語文法・形態論』は、その後何度か読み返す書物になっていた。

[2] アメリカ言語学などからの影響：アメリカ構造言語学では、形態論の研究に興味を引かれた。E. A. Nidaの *Morphology* などを横目で眺めた。また、そ

の影響もあり、後年『日本文法体系論』(1994)としてまとめられる森岡健二の研究にも興味があった。N. Chomskyの変形生成文法からは、研究姿勢・精神として「明示性・包括性・首尾一貫性」を学んだように思う。仁田がより直接的に影響を受けたのは、C. J. Fillmoreの研究であった。彼の“The case for case”(1968) や “Types of lexical information”(1968) や “The grammar of hitting and breaking”(1970) などを収録し、『格文法の原理』(1975)が翻訳出版されている。また、W. L. Chafe 1970 *Meaning and Structure of Language* (邦訳『意味と言語構造』1974)も興味深く読んだ。さらに、ヘルビヒ『近代言語学史』(邦訳1973)も興味深かつた(東ドイツの研究者の手になる書、文法理論を中心とした学史、結合価文法の実践者)。当時の日本の翻訳状況は、生成文法の本を中心とするといったもので、アメリカの言語学書にバイアスのかかった紹介、という印象を持った。

### 4.2 現代日本語文法の記述的研究を志した者として刺激を受けた状況

現代日本語文法の記述的研究を志していた仁田に、この種の研究の必要性を感じさせた状況が当時二つほどあった。[1] 留学生が増え、非母語話者に日本語(日本語文法)を教える必要性・需要が高まったこと。[2] コンピュータによる日本語の言語解析・言語生成(自然言語処理)が本格化したこと。寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(1982・1984・1991)は、日本語教育の現場から生まれた優れた現代日本語の文法書である。ちなみに仁田の最初の論文は、「係助詞・副助詞と格表示」という『日本語教育』16号(1972)に掲載されたもの。仁田には、研究当初から日本語能力を有さない者にも役立つ文法分析・文法記述への志向性があった。

上記の二状況・領域は、当該の文法分析・文法記述の出来・不出来を確かめる一つの応用領域だと思われた。文法論の構築に主眼を置くのではなく、文法分析・文法記述を重視する研究を後押ししてくれた思いを持った。また、仁田には、真に優れた理論は実用にも役立つ、という抜き難い思い(神話)があった。後年、仁田は、「実用的にも真に優れたものを作成するためには、優れた分析の方法や記述の枠組みが用意されていなければならない。また逆に、実的に真に優れたものは、理論的にも貢献するところを有している」(『現代日本語文法1～7』2003～2010への「はしがき」)と記している。

従前の研究について、文とは、文の成立とは、といった文法の基本問題に対する深い思弁的な考察はあるものの、文の構造へのきめ細かい考察・記述、文の構成要素である語から文がどのように形成されるか、という規則の取り出しは極めて不十分、つまり、文法論はあるが、文法現象を分析・記述した文法記述は存しないあるいはまだまだ不十分と、当時仁田には感じられた。文法的で容認可能な日本語文の的確な作成・解釈には、従来の文法では十分な成果は期待できない、より包括的な記述文法書の作成と文法情報を十分含んだ辞書の作成を目指さねば、という思い・願いがあった。1970・80年代の仁田の仕事について、渡辺実は、「早くから Lexico-Syntax を唱えた仁田義雄（『語彙論的統語論』昭和五五、明治書院）は、むしろ陳述論が職能という抽象的な方向へ歩んだことへの軌道修正から出発したと言ってよかろうが、……」（1995「文法（理論）」『国語学の五十年』：102）と捉えている。

## 5 仁田の研究を後押ししてくれた環境・条件

1970年代後半から、自らの研究を行っていくうえで、さらに言えば現代日本語文法の記述的研究が進められていくうえで、それを後押ししてくれているように（主観的にはあろうが）、仁田に思われた状況について、いくつか挙げていく。

[1] 学びの場：研究者は、いろいろな人々（の研究）と交わり情報を交換し、刺激を受け合いながら成長していく。それは、またその研究者にとっての学びの場である。出身大学・学会・研究サークル・人との個人的なつながりがそれである。仁田の場合、1980年4月に始められた「土曜ことばの会」がその重要な一つであった。この私的研究会から、「日本語文法談話会」が生まれ、「日本語文法学会」（2000年設立）へと成長していった。仁田の研究の持続は、同行者の存在（益岡隆志）や同種の方向性を有していると感じられた同世代（村木新次郎）、理解者・励ましを得た存在（渡辺実・寺村秀夫）、さらに、共に学び合う後からやって来た多くの学友によって支えられていた。英語学などの外国語学の研究者による日本語文法研究の増加も、一つの刺激になった。

1979年、渡辺実の提案により京都大学の渡辺研究室で若手の研究者が集ま

って自らの研究を話す、という会が行われた。仁田も尾上圭介も参加。この会は1年続き、引き続き他の多くの研究者を加え、1980年から1982年の3ヶ年科研費を得て、副用語の研究を行った。結果は『副用語の研究』（1983）として刊行。この集まりは、楽しく、研究者の輪の広がりを感じるものであった。

[2] 市販専門誌の刊行：研究者にとって、学会誌は自らの研究成果を発表する重要な場である。それとともに、市販の専門誌も自分の研究成果・考えを多くの人に知ってもらう場であった。仁田が研究者として歩み始めた頃、『月刊言語』（1972年4月創刊～2009年12月休刊）があり、『日本語学』（1982年11月創刊）が少し経って誕生した。年1回程度であるが、『国文学解釈と鑑賞』（これも今は休刊）も日本語研究を特集した。市販専門誌は、発表する場を提供・拡大してくれた。

[3] 関連学会の誕生：既に見たように、非母語話者への日本語教育は、包括的できめ細かく記述的な文法研究の必要性を感じさせてくれた。非母語話者の日本語学習者そして彼らへの日本語教育の需要の広がり、1962年「外国人のための日本語教育学会」（後の日本語教育学会）を誕生させることになる。日本語教育学会の誕生は、現代日本語文法の記述的研究を後押ししてくれることになった。

[4] 行政・大学：日本語教育の広がり、間接的に現代日本語文法の記述的研究の遂行を後押ししてくれることになった。以下、日本語教育およびそれに携わる人達の育成を計る施策の主だったものを、いくつか年表風に挙げておく。

- 1954年 「国費外国人留学生招致制度」発足
- 1954年 東京外国語大学・大阪外国語大学で1年制の留学生別科設置
- 1955年 国際基督教大学に日本語専攻課程設置 [同大学での日本語教育プログラム開始は1953年]
- 1962年 早稲田大学語学研究所開設
- 1968年 東京外国語大学特設日本語科（4年制）設置
- 1974年 国立国語研究所に日本語教育部設置 [76年日本語教育部、日本語教育センターへ]
- 1976年 天理大学・日本語教員養成課程設置

非母語話者への日本語教育の需要が高まり、日本語教育に従事する人間が増えることになった。日本語教育従事者・日本語教育の研究者を養成するために、大学にその種の学問領域を教育・研究する部門が誕生することになる。その結果、現代語文法を研究対象とする研究者も、大学のその種の学科や専攻での教育に必要とされることが増えた。就職口が増えることにつながった。

[5] 社会情勢：大学が日本語教育部門の学科や専攻を設けるようになったのは、日本語教育の需要の高まりが直接の要因であるにしても、それだけが理由ではない。非母語話者の日本語学習者が増えるようになったのは、そもそも日本の経済が発展し、日本への留学生が増加したことによる。また、大学・学部・学科が増えていった背景には、団塊の世代などに代表される大学進学学齢人口の増加がある。その意味で、人口増加を含め日本の経済状況の発展が、当然と言えば当然であるが、現代日本語文法の記述的研究の進展にも影響を与えている。

また、日本語を研究する研究者人口が増加した。その傍証として日本語（国語）学会会員数を示せば、おおよそ1975年は1560人、1985年は2050人、1995年は2120人、2005年は2200人のように増加していった。ちなみに、2016年にはほぼ1660人に減少。研究人口の増加は、各研究領域での研究者の増加につながる。それに応じて、現代日本語文法の研究者も増えていった。

[6] 振り返ってみて：現代日本語文法の研究をしていた仁田が研究者として幸運にも生き延びられたのは、大学という研究・教育機関に就職できたことが大きな要因である。1975年、仁田は大阪外国語大学留学生別科に就職し、寺村秀夫と中級の構文を担当するとともに、教養科目の国語学をも持つ。1978年京都教育大学国文学科に転出、そして、大阪大学大学院文学研究科現代日本語学講座での教え子を中心に30名を越す仲間との共同作業により、『現代日本語文法』（全7巻、2003～2010）を編集・刊行することになる。

仁田が研究を始めた頃は、自分達が使っている現代日本語の文法のような分かっていると思われるものを分析・記述することが、学問・学的営みになるのか、という疑念がまだあった時代である。そして、その後、そのような営みが学問・学的営みとして許され認められるようになっていった時代であった。この間の歩みは、現代日本語記述文法の学としての承認のためへの努力・歩みであった。

注記：本覚え書きは、日本語学会の2019年度秋季大会でのシンポジウムのパネリストとして話したことに基づいている。

#### 参考文献（\*をつけた文献は国立国語研究所のウェブサイトからダウンロード可能）

##### 〈書籍、論文〉

- 大石初太郎・宮地裕・飯豊毅一・吉沢典男（1960）『国立国語研究所報告18 話しことばの文型（1）』\*
- 大石初太郎・宮地裕・南不二男・鈴木重幸（1963）『国立国語研究所報告23 話しことばの文型（2）』\*
- 大久保忠利（1968）『日本文法陳述論』明治書院
- 大野晋（1950）「言語過程に於ける詞・辭の分類について」『国語と国文学』27(5).
- 奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質」『国語国文』22(2),22(3).
- 言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論』むぎ書房
- 国語学会（編）（1995）『国語学の五十年』武蔵野書院
- 阪倉篤義（1952）『日本文法の話』教育出版
- 佐久間鼎（1942）『現代日本語の研究』厚生閣
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』くろしお出版から再版（1995）
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎（1985）『国立国語研究所報告82 現代日本語動詞のアスペクトとテンス』\*
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 永野賢（1951）『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞』\*
- 永野賢（1970）『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京堂
- 西尾寅弥（1972）『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』\*
- 仁田義雄（1972）「係助詞・副助詞と格表示」『日本語教育』16
- 仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院
- 仁田義雄（1983）「研究グループ自己紹介土曜ことばの会」『日本語学』2(2).
- 仁田義雄（1988）「文法論争」金田一春彦・林大・柴田武（編集責任）『日本語百科大事典』大修館書店
- 仁田義雄（2012）『日本語文法の歩みに導かれ』（第7・8章）くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（編）（2003-2010）『現代日本語文法1～7』くろしお出版
- 芳賀綏（1954）「“陳述”とは何もの？」『国語国文』23(4).
- 林四郎（1960）『基本文型の研究』ひつじ書房から再版（2013）

- 林四郎 (1973) 『文の姿勢の研究』 ひつじ書房から再版 (2013)  
 ヘルビヒ, ゲーアハルト (岩崎英二郎訳) (1973) 『近代言語学史』 白水社  
 松下大三郎 (1928) 『改選標準日本文法』 勉誠社  
 三尾砂 (1939) 「文における陳述作用とは何ぞや」 『国語と国文学』 16(1).  
 三尾砂 (1942) 『話言葉の文法 言葉遺篇』 くろしお出版から再版 (1995)  
 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』 三省堂  
 三尾砂 (1958) 『改訂版話しことばの文法』 法政大学出版局  
 三上章 (1953) 『現代語法序説』 くろしお出版から再版 (1972)  
 三上章 (1960) 『象は鼻が長い—日本文法入門』 くろしお出版  
 南不二男 (1964a) 「複文」 『講座現代語6 口語文法の問題点』 明治書院  
 南不二男 (1964b) 「述語文の構造」 『国語研究』 18. 国学院大学  
 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店  
 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店  
 三宅武郎 (1934) 『音声口語法』 明治書院  
 宮島達夫 (1972) 『国立国語研究所報告43 動詞の意味・用法の記述的研究』\*  
 宮地裕 (1971) 『文論』 明治書院  
 森重敏 (1964) 『日本文法通論』 風間書房  
 森重敏 (1965) 『日本文法—主語と述語』 武蔵野書院  
 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』 明治書院  
 渡辺実 (1953) 「叙述と陳述—述語文節の構造」 『国語学』 13, 14.  
 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房  
 渡辺実 (1995) 「文法 (理論)」 『国語学の五十年』 武蔵野書院  
 渡辺実 (編) (1983) 『副用語の研究』 明治書院  
 Nida, E. A. (1946) *Morphology*. University of Michigan Press.  
 Fillmore, C. J. (1968a) “The case for case.”  
 Fillmore, C. J. (1968b) “Types of lexical information.”  
 Fillmore, C. J. (1970) “The grammar of hitting and breaking.”  
 (以上3論文は、フィルモア, チャールズ (田中春美・船城道雄訳) (1975) 『格文法の原理』 三省堂所収)  
 Chafe, W. L. (1970) *Meaning and Structure of Language*. (青木晴夫訳 (1974) 『意味と言語構造』 大修館書店)

〈講座物、定期刊行雑誌〉

- 『日本文法講座』 正編6巻+続編4巻 (1957-1958) 明治書院  
 『口語文法講座』 6巻 (1964-1965) 明治書院  
 『月刊文法』 (1968年創刊-1971年休刊) 明治書院  
 『月刊言語』 (1972年4月創刊-2009年12月休刊) 大修館書店  
 『日本語学』 (1982年11月創刊) 明治書院  
 『国文学解釈と鑑賞』 (現在は休刊) 至文堂